

優秀賞

『こころ』

夏目漱石 著、岩波書店、1989.

王 婉（文学部 日本語日本文学科 1年）

高校の現代国語の授業で夏目漱石について学んだことがきっかけで、この本を選びました。先生が「『こころ』は世代を超えて人間の本質を問う名作だ」と紹介してくださいました。読む前は、古い小説なので難しく感じるかもしれないという不安と、どんな「こころ」が描かれているのかという期待が入り混ざった気持ちでした。

この作品は、青年の「私」と、何か重い秘密を抱えているように見える「先生」との交流から始まります。物語は、先生の死後に届いた遺書によって、その核心へと一気に突き進みます。遺書には、先生の青春時代、親友とも言うべき「K」との精神的な絆、そして二人の間に立った一人の女性をめぐる恋愛葛藤と、その結果として招いた「K」の自死という、取り返しのつかない悲劇が描かれています。この作品が扱うテーマは、友情、恋愛、人間のエゴイズム、そしてそれに伴う罪と贖罪の苦しみです。特に心に残ったのは、「K」が先生に自分の恋心を打ち明けた直後、先生がその女性に先に求婚してしまう場面です。また、先生が終生、その行為への後悔と罪の意識に苦しみ、「覚悟」を決めるに至るまでの過程にも深く考えさせられました。

この小説を読みながら、私は先生と青年「私」の関係に、かつて自分が憧れと少しの畏敬の念を抱いていた先輩との関係を重ねて感じました。また、先生が「世間は罪深い自分を許さない」と孤独に苦しむ姿には、自分が過去に些細な嘘や後悔を胸に秘め、一人で悩んだ経験が重なり、深く共感するとともに胸が痛みました。読む前は、過去の「過ち」をそれほど深刻に捉えていませんでしたが、読後は、自分の行動が他者に与える影響や、自分自身がどう生きるべきかを真剣に考えるきっかけとなりました。

この本を読んでから、人間関係の中で「自分の本心」と「行動」をもっと意識するようになりました。また、一見すると悪意のない判断や選択であっても、長い年月を経て人を、そして自分自身を苦しめる可能性があることを学びました。将来、人と深く関わる仕事をする時には、この本で得た「他者のこころの重みを理解しようとする視点」を活かしたいです。

この本の最大の魅力は、一つの過ちに人生を翻弄される先生の「人間らしさ」の描写そのものにあると思います。自分自身の内面と向き合い、生き方に悩むすべての人、特に多感な学生時代に読んでほしい一冊です。私にとって『こころ』は、自分という人間を深く見つめ直し、誠実に生きることの意味を教えてくれた、かけがえのない一冊となりました。